

哲学者から見たアクティブ・ラーニング 1

熊本大学准教授 苫野一徳

はじめに

「アクティブ・ラーニング」という言葉が教育界に広まってから、2年あまり。当初から、私はこの「アクティブ・ラーニング」の実践を推進する一方で、大きな危惧もまた表明してきました。以下では、その後全国の多くの学校でアクティブ・ラーニングの実践を見たり議論したりした経験を通して改めて考えたことを、書いてみたいと思います。

が、その前にあらかじめいっておきたいことがあります。

アクティブ・ラーニングを成功させるには、本当ならば、まずは今の教師の多忙感を解消し、自由に使える研究・研修費をつけ（オランダでは教師1人につき年間約13万円の研究費が出ます）、十分に意義深い研修の機会を作る必要があります（それもお仕着せではなく自由に選択できる研修を）。つまり、実りあるアクティブ・ラーニングのためには、教師一人ひとりの努力にばかり頼るのではなく、システム（政府・行政）による徹底的な支援が必要なのです。

その意味で、今の体制はまだ不十分だと私は思います。ですので、以下で私はアクティブ・ラーニングの実践をいくらか批判的に検討しますが、それは、実践者を批判しているというよりは、むしろ「システム」や「慣習」を批判しているのだと受け取っていただければと思います。そして、ではどのような方向に向けて「システム」や「慣習」を変えていくべきかという問いに対する提言として、お読みいただければ幸いです。

1. “一斉アクティブ・ラーニング”という矛盾

アクティブ・ラーニングの意義は、今さら繰り返すまでもないでしょう。黙って座って先生の話聞いてノートを取るといういわゆる講義型の一斉授業が、多くの場合非常に効率の悪いものであ

ることはよく知られています。そのことを明らかにした研究も多くあります。

もちろん、時と場合によっては講義形式の方が効果的である場合もあります。しかしそれはあくまでもある限られた時間内の話であって、1日の授業のほとんどが一斉授業であれば話は違います。黙らせ座らせ先生の話聞かせ続ける授業を続けることは、子どもたちが“主体的”に学ぶ機会をほとんど奪っているとさえいいでしょう。

その意味で、私はアクティブ・ラーニングを大いに推進してきました。しかし同時に、昨今のアクティブ・ラーニングの実践をたくさん見てきて、当初抱いていた危惧が現実のものになっていることも強く感じています。

多くのアクティブ・ラーニングの実践は、私が“一斉アクティブ・ラーニング”と呼んでいるものになってしまっているように思われるのです。

それはつまり、教師が決めた通りの学習の型に沿って、教師が決めた通りの結論に向かって学習を誘導していくアクティブ・ラーニングです。つまり、授業における学びのスタイルは、従来の「一斉授業」同様結局のところ教師によって決められたままなのであり、そこに子どもたち自身の選択の余地はほとんどないのです。

いったい、日本の学校教育には、「こうしなさい、ああしなさい」があまりにも多すぎるように思います。ノートの取り方から発言の仕方に関するまで、「型」を決めることが多すぎる。

もちろん、「子どもたちにいきなりアクティブ・ラーニングをさせてもできないから、ある程度型を決める必要がある」という主張はもっともです。でもそれなら、経験を重ねるにしたがって、少しずつその「型」を子どもたち一人ひとりに委ね開いていく必要があるはずなのです。

2. 学び方は人それぞれ

大学の授業で、私は学生たちにたくさん本を読んでレジュメを書いてもらったり、レポートを書いてもらったりしています。また、毎回グループディスカッションをしたり全体討論をしたりもし

ています。

そんな私の授業を初めて受けた学生の中には、「レジメはどうやって書けばいいんですか?」「ディスカッションではどうやって発言をすればいいんですか?」などといってくる学生がたくさんいます。私は、ポイントは手短かに伝えるものの、「これからの半期をかけて、人のレジメを参考にしたりディスカッション経験を積んだりすることで、自分なりの一番いいスタイルを見つけたい」と答えます。

ことほどさように、何もかも決められていなければ、レジメひとつ自分の頭で考えて書くことができない学生が多いんだなあ、私は時折ひどくショックを受けます。でも同時に、これは学生たちを責めるべき問題ではないとも思います。責められるべきは、「決められたことを決められた通りに学ぶ」ことばかり教えてきた、私たち大人なのです。その意味で、「アクティブ・ラーニング」のやり方を手取り足取り決めてしまう昨今の“一斉アクティブ・ラーニング”には、強い危惧を抱かざるを得ません。

本来、アクティブ・ラーニングにおいて最も重要なのは、まず「学び方は人それぞれ」だということを教師がとことん自覚することです。そしてその多様性をとことん尊重することです。

たとえば、私は哲学徒ですので——といっているかは分かりませんが——、できるだけ一人で引きこもって本を読みあさる学びを好みます。そしてその上で、月に一、二度、研究仲間たちと学びの成果を持ち寄って議論します。「協同的な学び」の機会がこれよりずっと多いと、自身の学びがかえって阻害される気がします。

つまり私にとっては、仲間たちと「アクティブ」に議論するのと同じくらい、一人で引きこもって読み書きするのは「アクティブ」な学びなのです。にもかかわらず、もし私の許容量を超えて協同的な学びを強要されたとしたら、非常に息苦しくなって、学びの質も生産性も著しく落ち込んでしまうことでしょう。

大学でも、私は基本的に「協同的な学び」を中

心に授業をしています。上のような理由から、そのスタイルに合わない学生にはまた別のスタイルを見つけて個別に授業を進めるようにしています。そもそも、私たちには、今はちょっとウツっぽいか、失恋のショックで人としゃべる気にならないとかいった時もあるわけです。子どもだろうが大学生だろうが、教師が決めたスタイルに無理やり合わせさせるのはやはり非効率です（いうまでもなく、教員の研修も同様です）。

3. 教科カリキュラムから探究型カリキュラムへ

と、そう考えると、昨今のアクティブ・ラーニングには、実は乗り越えなければならない根本的な問題があることが分かります。

それは、教えるべき学習内容、教科書、カリキュラムなど、一切合財があらかじめ決められてしまっているという問題です。いつ、何を、どの教材で学習するかが決められているから、どれだけアクティブ・ラーニングを取り入れるといっても、結局はその方法もまた、多くの場合教師のお仕着せにならざるを得ないのです。ここに、アクティブ・ラーニングの根本的な矛盾があります。

したがって重要なことは、現在の強固すぎる教科カリキュラムを、15年くらいかけてできるだけ探究型のカリキュラムに転換していくことです。このカリキュラムの抜本改革なしに、どれだけ授業の方法を講義形式からアクティブ・ラーニングに変えたところで、私にはあまり意味がないように思われます。

探究型のカリキュラムとは何か。一言でいうなら、それは、自ら決めたテーマや与えられたテーマについて、自分（たち）なりの問いを立て、自分（たち）なりの方法で、自分（たち）なりの答えにたどり着く、いわゆる「プロジェクト型の学び」(PBL / Project-based Learning) を中核としたカリキュラムです。

たとえば、現代世界の最大の問題の一つ「テロリズム」をテーマとして設定したとしましょう。その際、ある子どもたちは、「現代テロリズムの実情」を知りたいという問いを立てるかもしれま

せん。あるいはまた別の子どもたちは、テロの歴史に特化した問いを立てたり、宗教との関係や経済との関係に特化した問いを立てたりするかもしれません。

このように、自身で立てた問いについて、子どもたちは、インターネットや図書資料を調べたり、専門家にインタビューしたりと、それぞれに学びの方法を工夫しながら、そして学び方それ自体を学びつつ探究を深めていくのです。

そんなことは不可能だ、とよくいわれます。しかしそんなことはありません。たとえば、「プロジェクト」を中心としたカリキュラムを実践している有名な学校に「きのくに子どもの村学園」がありますが、この学校はもう25年も続いていて、その実践は着実に全国に広がっています。あるいは、今大きな注目が集まっている国際バカロレア (IB) なども、その基本は探究型です。今や世界の教育のパラダイムは、大きく変わろうとしているのです。大学入試改革も、多くの困難を抱えながらも今後確実に進んでいきます。

4. 共同探究者としての教師

このような探究型のカリキュラムでは、お仕着せの学習内容も教材も学習方法も、厳格には決められません。学びは、子どもたちの「探究」を軸にして進められていくからです。その探究の過程で、子どもたちは、必要な知識を獲得したり、活用したり、さらには創造したりするのです。したがって、学校には豊富な図書資料、自由に使えるインターネット、また教師以外の大人や専門家の協力なども必要になります。

教師の役割もおのずから変わってきます。これまで、教師は教えるべきものを厳格に持ち、その答えを持っている存在でした。子どもたちは、教師の頭の中にある答えを取りに行くような勉強をしていました。

しかし探究型のカリキュラムになると、その答えを教師が知っているとは限りません。むしろ知らないことのほうが多いでしょう。でもそれでいいのです。教師は、答えを持っている者である以

上に、子どもたちの「共同探究者」となって、その探究を支えガイドする役割を担う必要があるのです。

学校を、決められたことを決められた通りに勉強させる場所から、子どもたち自身の探究を軸にした学びの場所へと変えていくこと。これこそ究極のアクティブ・ラーニングというべきでしょう。

5. 学習内容の精選を

最後に、「でもそんなカリキュラムで教科書の内容を全部学習できるのか？」という疑問にお答えしておきたいと思います。

答えは簡単です。今後のカリキュラム改革の過程で、お仕着せの学習内容を精選していけばいいのです。

そもそも、わたしたちはなぜ、みんながみんな元素記号を覚えなければならないのでしょうか？ クリミア戦争の年号を覚えなければならないのでしょうか？ 芥川龍之介を読まなければならないのでしょうか？

これに絶対確実な答えを与えられる人はいません。なぜならこれは、公教育が始まった頃の、いわゆる「学問中心カリキュラム」の名残だからです。つまり私たちが学校で学んでいるさまざまな学習コンテンツは、多くの場合、さまざまな学問の観点から、その基礎的知識とされるものを薄めて小中高のカリキュラムへと移行させたものなのです。そしてそれは、子どもたちのためというよりは、むしろ産業主義社会における人材選抜のツールとして利用されてきたのです。

しかし今後は、「この学習内容は、本当にすべての子どもが絶対に学ばなければならないものなのか？」という観点からカリキュラム改革を行う必要があります。根本的に重要なのは、「探究する力」です。この探究を軸に、子どもたちは精選された学習内容を学んだり、さらにはそこを超えて活用したり創造したりする。そのようなカリキュラムのあり方をめざす改革と一体になって初めて、アクティブ・ラーニングは本来の意義を発揮できるようになるのです。